

問題一 次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

近代化は、前近代の伝統的束縛から人間を解放し、社会において生産された富の公正な再分配を徐々に可能にしていることによって近代産業社会を生み出してきた。しかし、近代化の進展に伴い、生産力が飛躍的に増大するにつれて、人間に対するリスクと^①キョウイの潜在的可能性もまた、幾何級数的に顕在化してきた。近代化の過程は、自らの技術と経済の発展がもたらしてきたリスクをも問題として処理せねばならないという点で、^②自己再帰的とならざるを得なかったのである。では、テクノロジーが生み出した様々なリスクを、いかに認知し、管理し、ときに回避しときに隠蔽していくべきか。そのような課題に直面した現代社会のありようを、ウルリヒ・ベックは「リスク社会」と呼んでいる（邦訳題名は『危険社会』だが、原題 *Risikogesellschaft* に合わせて「リスク社会」と呼ぶことにする）。かつて、近代産業社会は、自らの生産力の増大によってもたらされた社会的富の再分配によって、貧困と闘ってきたが、その陰で、その予期せぬ副作用として、富の源泉である自然環境が汚され破壊され続けてきたことに無頓着であった。その結果、近代化の延長線上に、イが発生してきたというわけである。ここでリスクと呼ばれるものは、地球規模で進む人類全体に対するリスク、たとえば自然環境の破壊や、核分裂や核廃棄物によって発生するリスクのことを指している。ベックの著作が刊行された一九八六年が、チェルノブイリ原子力発電所の爆発した年であることを思い起こせば、その後の同書の影響力の大きさが容易に察せられるだろう（そして、二〇一一年に「フクシマ」を経験した我々にとって「リスク社会」の^③キョウイはひときわ切実かつリアルである）。

では、このようなリスク社会にあって、我々が選択すべき倫理体系は果たして統治の倫理であろうか、それとも市場の倫理であろうか。そもそも、水や空気の汚染、あるいは放射能汚染のように、顕在化しないまま、国境も貧富の差も宗教も何もかもを超えて地球規模で蔓延していくリスクに、排他的な領土占有に動機づけられた統治の倫理は、原理的に対応不可能であるだろう。金融市場に典型的なように、グローバルな展開が可能なのは、市場の倫理である。しかし、富の配分に際して、公正な取引は十分に規範的効力を発揮し得るが、リスクの配分に際して、何がどのように取引されるのであろうか。たとえば、発

展途上国の二酸化炭素排出権を先進国が買い取るという形での取引は、地球温暖化というグローバルなリスクに対して、決して有効な回避策とは言えないのではないか。ここには、^④「見ると市場の倫理に服しているようだが、実は、排他的な統治の倫理が紛れ込んだ国家同士の相互自己充足しか見出されない」。「取る(take)のでも」「取引する(trade)のでもなく、^⑤地球規模のリスクを互いに「分かち合う(share)ための第三の倫理体系が今こそ強く求められるべきではないだろうか」。

福島原発事故の後、日本中の多くの人たちが、原子力関係の「専門家」と言われる人たちに大きな信頼と期待を寄せ、それが裏切られた結果、それまで以上に大きな失望を味わったことは記憶に新しい（同様のことは、コロナ禍における医療・保健関係の「専門家」についても言えるだろう）。しかし、よくよく考えてみれば、専門家とは予言者や占い師などではなく、あくまで専門領域に関して何をどこまでわかっていて、それ以外のことはまだわかっていない、ということを確認に知っている人のことに過ぎない。たとえば、医者は患者の病状を調べ、健康体へと回復するための治療法を見出すことができるという意味で病氣と健康に関する領域の専門知をもつ者である。同様に、建築家は、家に関する領域の専門知をもつ専門家である。それゆえ、病氣になれば医者にかかり、改築するときは建築家に頼むのである。しかし、末期医療において、いつ延命治療を止めるべきかについて悩んだ患者が、医者にその答えを求めたとしても、医者にもその正しい答えはわからないはずである。なぜなら、人間が生きていくことの意味とは何か、よく生きるとはどういうことか、人は死ぬとどうなるのか、そうした問いは、厳密には医療の扱う専門領域を超えた問いだからである。もし、医者が自らの専門的技術知の限界を超えて、そのような問いの答えを知っているかのように自ら思っているとしたら、それは傲慢な思い上がり過ぎない。

ソクラテスのいわゆる「不知の知」とは、まさにこのことを指している。ソクラテスは決して無知を^⑥シヨウレイしているわけではない。医療という専門領域において、何も知らない無知な者に誰も病氣を治してもらおうとは思わないし、そもそもそのような者は医者と呼べはしないのである。しかし、医療知であれ建築知であれ、領域的な専門知が扱うことのできない、領域を超えた問い、たとえば、よく生きるとはどういうことか、幸福とは何か、どうやって自らの死に立ち向かえばよいのか、といった問いが少なからずある。普段はことさらに問うこともなく過しているのに、何か大きな挫折を経験する

と、自らの生き様を振り返り、これからの人生に深く悩むことが誰にもあるはずである。そんな時、あなたは誰のところに相談に行くだろうか。そもそも、「私がいかに生きるべきか」という問いに答えることのできる領域的専門知などありはしない。占い師まがいの似非専門知ならいくらかでも名乗りを上げることだろうが、（い）「いやしくも専門知と言いつける限り、そこには必ず限定された専門領域があるはずであり、それを越えた事柄に関しては決して無責任に答えたりはしないというのが本来の専門家というものである。つまり、ソクラテスの言う「不知の知」とは、そのように自らの専門領域を超えた事柄については何も知らないということを知っているという意味なのである。

いや、一人だけ専門家がいないのではないか、それが哲学者じゃないか、そう思っている人がいるかもしれない。確かに哲学者が、「人はいかに生きるべきか」を考へるというのはいかにありそうなことである。しかし、そのような問いをもつというのと、その答えを知っているというのととはまったく別である。よく知られているように、「哲学」という語の原義は、ギリシア語の「フィロソフィア」であるが、その意味は「知恵への愛」ということであって、決して知恵そのものを意味してはいない。

したがって、環境汚染や放射能汚染のような地球規模のリスクに対しても、それぞれの専門家は、現時点でわかっていることとまだ知られていないことについて区別できる人であり、その限りで少なくとも今何が知り得ないかを知っている人である。また、そのようなリスクを前にして「私はいかに生きるべきか」「何を為すべきか」という問いが、いかなる領域的な専門知にも答えを見出せない、その意味で哲学的な問いである限り、たとえ哲学者であろうが（あるいは哲学者だからこそ）、その答えを知っている者ではあり得ない。しかし、少なくとも、そのように我々には知り得ない事態を^③シヨウライするリスクに今直面しているということを知ることができる。この意味での「ロ」「こそ、先に第三の倫理体系として掲げた「分かち合う」倫理を画定する最初の規範と言えらるかもしれない。もちろん、科学技術の進展は、今後も我々に多くの恩恵をもたらす続けてくれることだろう。しかし、そのような科学技術の進歩が、今我々の背に重くのしかかっている地球規模のリスクを来るべき未来に解消してくれるという可能性は限りなくゼロに漸近し、むしろ^④そのこと自体が人間の有限性を立証してしまう

という事実を自覚するところからしか、リスクを共に「分かち合う」という倫理体系を語り始めることはできないのではないだろうか。

（土橋茂樹「振り返り向きざまのリアル」による）